

船橋市地域生活支援拠点 活動報告書 2023

【船橋市地域生活支援拠点について】

地域生活支援拠点とは、障害のある人の重度化・高齢化や親亡き後を見据えて障害のある人やその家族が地域で安心して暮らしていけるよう、地域全体で支援する仕組み(システム)のことです。

船橋市では、地域の各機関が協力しあい役割を担う**面的整備型**という仕組みを採用しています。

この拠点事業では、緊急時の対応や、緊急時に備えた相談業務の中心的な役割を社会福祉法人大久保学園に委託し、「**あんしんねっと船橋**」という名称で稼働しています。

たとえば、ご家族の怪我や病気による
緊急入院で本人の介護者が不在となって
しまった場合に、あんしんねっと船橋では

- 緊急対応が必要と判断した場合、関係機関とともに対応します。
- 相談を受け、宿泊が必要であれば、短期入所等の受け入れ先を探します。
- 緊急対応後は、地域に戻った時にどんな支援が必要かなどを複数の事業所や関係機関とともに話し合い、本人やご家族に提案します。

地域生活支援拠点の詳細は市ホームページに載せております。
詳しくは右の二次元コードをご参照ください。

もしくは船橋市ホームページのトップ画面より
【**地域生活支援拠点**】と検索！



面的整備型のイメージ図



発行年:2024年(令和6年)

発行:船橋市地域生活支援拠点運営委員会

編集:船橋市健康福祉局福祉サービス部障害福祉課

TEL:047-436-2343

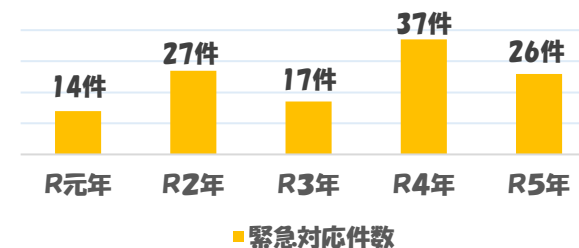
【活動実績について】（令和6年3月末時点）

①【緊急対応件数について】

緊急性の高い相談で、連絡を受けた関係機関では対応しきれず、短期入所等への緊急受け入れが必要な場合、あんしんねっと船橋へ相談が繋がれます。令和5年度はあんしんねっと船橋で26件の緊急対応を行いました。

（26件の内訳）**性別**男性12件、女性14件 **年代**10代7件 20代6件 30代4件 40代3件 50代4件 60代2件 **障害種別**精神障害6件、知的障害12件、身体障害2件、身体・知的重複1件、精神・知的重複5件

緊急対応件数実績

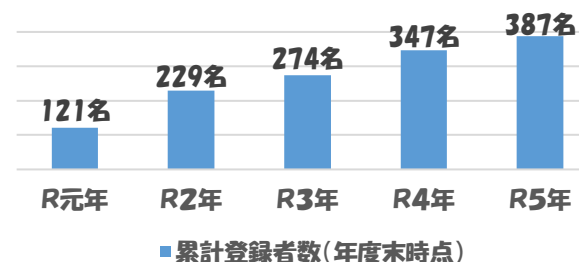


②【事前登録者数について】

あんしんねっと船橋では、緊急時にスムーズな受け入れを行うために、事前登録面談にて本人の障害特性や服薬・アレルギー等、緊急時の支援に必要な情報を収集しています。令和5年度末時点で計387名の事前登録者がいます。

387名内訳（精神障害54名 知的障害241名 身体障害20名 身体・知的重複53名 精神・知的重複11名 身体・精神重複6名 三障害重複2名）

事前登録者数の推移



③【研修実績について】

各サービス事業所の方々へ拠点事業に対する理解を深めてもらうための研修会を開催しています。

■令和5年2月24日「もっと教えて 地域生活支援拠点」

船橋市が目指す地域生活支援拠点システムの検討にあたり、講師の方から拠点システムの考え方や他自治体での拠点事業の整備手法の好事例についてお話しいただきました。

■令和6年2月14日「相談・GH・就労系事業所 合同意見交換会」

サービス種別の異なる事業所間での意見交換会を開催するにあたり、あんしんねっと船橋の事業説明・活動報告を行いました。

④【船橋市地域生活支援拠点運営委員会について】

船橋市地域生活支援拠点運営委員会では、拠点システムが正常に機能しているかどうかや、各機関での連携強化の必要性などを定期的に確認し、課題の抽出や解決策を話し合っています。

年3回を目安に開催をしており、令和5年度は3回開催しました。

（令和5年度に検討を行った議題例）

- ・各サービス事業所が拠点において担える役割の整理
- ・船橋市地域生活支援拠点システム運用解説の見直し
- ・活動報告書の作成について
- ・緊急対応ケースの共有



【地域生活支援拠点の面的整備事例 その①】あんしんねっと船橋提供

※事例は実際の相談を改変した架空の事例です

●本人状況 30代女性 身体・知的・精神手帳所持 医療的ケアあり 70代母親と2人暮らし

本人は他市在住の頃、近隣住民と何度もトラブルを繰り返しており、船橋市へ転居してきました。転居後も、高齢の母親では本人の行動を止められないことがあり、自宅近くの公園に行き、迷惑行為を起こし、その都度警察に保護されていました。

本人には相談支援専門員がついており、基幹相談支援センターふらっと船橋も本事例に介入しています。



●支援開始と問題点

本人の外出先での行動について母親が対応しきれないということで、警察より本人の保護、支援についてあんしんねっと船橋に相談がありました。連絡を受けて、母親・相談支援専門員・ふらっと船橋・障害福祉課・他市在住時の通所事業所等に連絡し、本人の状況を聞き取りました。また、前記関係機関と連携を図りケース会議を開催し、市内グループホームの体験利用や、必要に応じて本入居に繋げることに方向性を定めて支援方針を立てました。その方針をもとにグループホームや日中活動系事業所を体験・見学予定でしたが、本人の在宅希望等もあり、見学には至らず、今後については関係機関で世帯を見守ることとして母親との在宅生活が継続となりました。

その後、見守りを行う中で、母親との間でお互いに暴言や暴力による問題が起きていることが分かり、緊急対応が必要な状況となりました。

●地域生活支援拠点を絡めた支援

対応を行う中では、本人から関係機関担当者への暴力行為もみられたため、福祉ではなく医療での入院調整を行いました。調整が難航したため、関係機関(障害福祉課・警察)と協議し、有事の際は警察で対応いただくことを確認したうえで、大久保学園の短期入所で一時的に緊急受け入れを行いました。その間に、各関係機関とケース会議を行いながら、今後の方向性として、母親と世帯分離を行い、本人の居住先(状態によっては入院先)を探していく形となりました。

あんしんねっと船橋の機能の一つである船橋市グループホーム連絡協議会事務局で市内事業所の空き情報を確認しつつ、本人は医療的ケアが必要な方のため、重度の方の受け入れを行う日中サービス支援型のグループホームも候補に入れながら調整を行い、見学・体験利用を行いました。その後、約1ヶ月を経てグループホームの本入居に至りました。



●その後

現在、本人はグループホームの生活に慣れ、日中は生活介護事業所に通所をしながら地域での生活を送っています。

今回の事例を通して、一事業所では対応が困難な事例でも様々な機関が連携し、本人の生活基盤の形成を行うことで、地域生活を継続することができたため、市全体で対象者を支える面的整備の重要性を改めて感じました。

【地域生活支援拠点の面的整備事例 その②】基幹相談支援センター「ふらっと船橋」提供 ※事例は実際の相談を改変した架空の事例です

●本人状況 40代男性 療育手帳所持 てんかん発作あり(服薬中) 80代父親と2人暮らし(母親は高齢者施設入所)

本人にはてんかんがあり、週に1~2回の発作があります。自宅や外出時に発作が出た場合は救急車を呼ぶこともあります。傾向から発作は長くは続かず、1~2分程度で鎮まり通常に戻る症状を繰り返しています。主に経過観察と時間計測のみで5分以上続いたら救急車を呼ぶという対応の方です。また、障害福祉サービスの利用が無い家庭で親亡き後の不安もありました。



●支援開始と問題点

父親にはケアマネジャーがおり、本人の支援を中心として通所先探し(生活介護)や「あんしんねっと船橋」への事前登録等を行いながら、障害介護世帯という認識でケアマネジャーと共に世帯支援を行っていました。

その後、父親の認知機能低下が見られ、金銭管理が難しくなったことから父親に成年後見人を付けることになりました。あわせて本人にも成年後見人を付け、両後見人との情報共有等を行っていました。

しかし、父親は後見人への理解ができず、お金への不安が強くなった際には警察等に何度も連絡をするようになりました。そのような中で訪問看護が毎日入り、都度話をしながら何とか在宅生活を継続している状況でした。

●地域生活支援拠点を絡めた支援

ある冬、父親はお金がかかるという理由で、電気代を気にして暖房器具を全く使用しない生活を送っており、「お二人の生命の危険からも使用するよう」と幾度も伝えましたが、意志は強く使用は難しい状況でした。連日の寒さにより不眠が続き、お二人ともに体調不良が見られ、この生活状況に危険を感じたため、父親のケアマネジャーと相談しお二人ともに緊急避難を行うべきとの判断を行いました。

緊急避難にあたり、「あんしんねっと船橋」へ緊急対応の相談や、ふらっと船橋からグループホームへ短期入所利用の相談を行いました。相談後、短期入所での受け入れが可能なグループホームが見つかり、父親の短期入所探しはケアマネジャーと連携し、父子双方での利用日を合わせる調整を行いました。(どちらかが自宅で一人にならないように)

それぞれの後見人に費用面の報告や短期入所の利用契約等を依頼し、同日の入居に繋げて緊急的状況から離脱することができました。また短期入所利用後に自宅へ戻るにあたり、相談支援事業所に繋げて、定期的に日中活動先へ通う調整も行いました。

●その後

本人はグループホームでの生活や通所先に通えた事が楽しかったようで、今回の経験がきっかけとなりお二人ともに定期的に短期入所を利用しています。現在は、グループホームの入居に向けて関係機関とチーム支援を継続しながら今の地域生活を見守っています。このケースのように福祉サービスや関係機関との繋がりの薄い家庭がまだまだ存在していると感じており、市内の関係機関と連携し、点(単独)ではなく面的(チーム)な仕組み作りを行うことが重要であると考えています。

